巻頭

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、
いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふあ
りけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざ
ましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下﨟の更
衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけて、人の心
を動かし、恨を負ふつもりにや、ままかりけむ、いとあつしくなり
ゆき、物心細げに里がちなるを、いよ〳〵飽かずあはれなる
ものに思ほして、人の譏をも憚らせ給はず、世の例にもな
りぬべき御もてなしなり。上達部上人なども、あいなく目
をそばめつゝ、いと苦き人の御おぼえなり。唐土にもかゝ

巻末

らせ給ふ。もとの木立、山のたゝずまひ、おもしろき所なる
を、池の心広くなどして、めでたく造りのゝしる。かゝる所
に思ふやうなる人を具して住まばやとのみ歎かしう思
し渡る。光君といふ名は、高麗人のめで聞えて、つけ奉りけ
るとぞ。

昭和三十一年一月九日以武田祐吉博士校訂紀州家本校了

室伏信助筆写 伝阿仏尼本校合本文

武田祐吉校合本文を 1956 年（西尾光雄『校註源氏物語桐壺』）に筆写したもの。室伏校合本文は、散逸した「伝阿仏尼本（紀州家旧蔵本）」本文を伝える極めて貴重な二次資料である。本書 59 頁参照。（参考文献、伊藤鉄也［1991］）